



|              |                                                                               |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 弥生墓制からみた和泉地域の特質                                                               |
| Author(s)    | 蓮井, 寛子                                                                        |
| Citation     | 待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 115-128                                                 |
| Version Type | VoR                                                                           |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/105034">https://doi.org/10.18910/105034</a> |
| rights       |                                                                               |
| Note         |                                                                               |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 弥生墓制からみた和泉地域の特質

蓮井 寛子

## はじめに

和泉地域の弥生研究は、池上曾根遺跡の大型建物と井戸など、中期後半に繁栄のピークを迎える大規模集落の中心構造の機能を焦点に議論が進められてきた。一方、墓制については目立った事例がないこともあり、議論の俎上に載ることはほとんどない。ただし、墓は集落を構成する重要な要素であり、その様相の把握は地域間関係やよりミクロな人的交流を考えるうえで必要不可欠である。

そこで本論では、弥生中期の和泉地域における墓制の時期的な変遷や小地域性を整理したうえで、他地域の墓制との比較分析から大阪湾沿岸地域内の地域間関係や和泉地域の弥生社会の特質についても検討する。

## 1. 既往研究の整理と本稿の目的

和泉地域では1960年代から四ツ池遺跡や池上曾根遺跡といった大規模集落の調査が進められ、集落動態や集落構造の把握を目指す研究が開始した（寺沢1974、酒井1984）。1990年代には池上曾根遺跡の評価をめぐり、「弥生都市」について活発な議論がなされた（乾1996、広瀬1998、秋山1999、若林2001）。近年では、新出資料の増加を踏まえ、より詳細な集落動態の分析がおこなわれている（池峯2006、山崎2006、三好2016）。

一方、当該地域の弥生墓制については、池上曾根遺跡の墓域の変遷を整理した大洞真白の論（大洞1999）や、墓域から出土する穿孔土器の地域性と変遷を論じた相馬勇介の論（相馬2020）などで触れられているが、目立った周溝墓の事例が認められないこと、大規模集落の事例が断片的なこともあり、総合的な把握はほとんど進められていない。ただし、葬送習俗の時期的な変化や小地域性を明らかにし、他地域の墓制と比較することは、和泉地域の特質や周辺地域との地域間関係を検討するのに不可欠であり、ひいては弥生社会全体の地域間関係や社会構造の解明にも役立つ。

以上のことから、本稿では、実態の明らかでない和泉地域の弥生墓制を多角的に検討し、和泉地域の特質および周辺地域との地域間関係の解明を主目的に、以下の3点について分析を進

める。すなわち、①和泉地域の周溝墓制に認められる諸要素の時期的変化、②和泉地域内部の葬送習俗の小地域性、③他地域との比較を通じた和泉地域の地域性の検討、である。なお、分析対象は当該地域の弥生墓制の中心をなす方形周溝墓と出土遺物（土器<sup>(1)</sup>）とし、中期中葉と後葉の時期区分については凹線文出現以前を中期中葉、以後を中期後葉とする。

## 2. 方形周溝墓制の時期的変遷

**和泉地域の環境** 本格的な分析に入る前に、本稿で分析対象とする和泉地域の情報を整理しておきたい。和泉地域は大阪湾と和泉山脈に挟まれた地域であり、山脈側の南東方向から海側の北西方向へ向かって多くの河川が流れる。弥生時代の集落は河川の流域に形成された微高地上に位置することが多い。北部では四ツ池遺跡、池上曽根遺跡、南部では三軒屋遺跡、男里遺跡などの大規模集落が知られ、特に池上曽根遺跡で検出された大型掘立柱建物と大型割り抜き井戸はあまりにも著名である。

周辺地域との関わりを示す外来系土器については、紀伊や生駒西麓地域のものが一定量認められ、瀬戸内地域や摂津との関係を示す土器も確認できる。南部の男里遺跡では大溝から紀伊産土器が全体の11%、生駒西麓産土器が0.4%を占めることが指摘されており（村上・中村2005）、河内と紀伊を陸路で結ぶルートの結節点であったと想定される。また、集落の大半が大阪湾へとそそぐ河川の流域に位置し、蛸壺などの漁労関連遺物が多く出土することを考えると、海を介した他地域との交流も容易な環境であったと考えられる。

**分 布** 墓域は主に自然堤防上や低位段丘上、丘陵の縁辺部などに築かれる場合が多い。基本的には居住域から一定の距離を保ち、居住に使用しない場所が選地されるようである。和

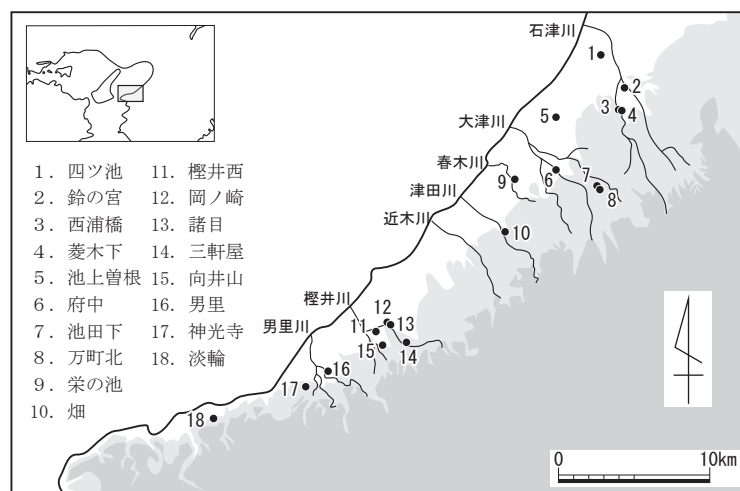


図1 和泉地域の周溝墓分布図

泉地域では現状、前期で1遺跡4基、中期で18遺跡100基の方形周溝墓が報告されている。後期前半の周溝墓は確認されておらず、後期中葉以後は府中遺跡や下池田遺跡等で方形周溝墓や円形周溝墓が造営される。分布状況をみると（図1）、大津川流域の四ツ池遺

跡を中心とする和泉北部北半地域、石津川・春木川・津田川流域の池上曾根遺跡を中心とする北部南半地域、樫井川・男里川流域を中心とする南部地域に分布範囲が分かれるようである。北部北半および南部地域では中期前葉から多くの周溝墓が造営されており（図2）、中期中葉以降に継続する。一方、南部地域では北部地域に遅れて中期後葉に周溝墓の分布が広がるため、両地域で周溝墓が墓制として定着する時期には時間差が存在する。

**墳丘規模と埋葬主体** ここからは、和泉地域で確認された各周溝墓の諸要素を多角的に分析し、当該地域の弥生墓制の実相を検討する。まずは各周溝墓の墳丘規模と埋葬主体数に注目する。なお、本稿では残存度が高いと考えられる墳丘基部の面積（図3）を墳丘規模として示す。畿内地域では中期前葉まで単数埋葬墓が一般的で中期中葉以降に複数埋葬が主体を占めること、埋葬数の増加傾向に伴い墳丘の大型化が認められることなどが既往研究により指摘されている（大庭 1999）。また、筆者は以前、中期後葉には大阪湾沿岸の摂津・河内地域で墳丘規模と主体部数の関係性に若干の地域差がみられることを明らかにした（蓮井 2022）。

和泉地域の様相をみると（図4）、中期前葉の段階から複数埋葬墓が散見され、特徴的な様相を呈する。中期中葉も四ツ池遺跡や菱木下遺跡で複数成人の埋葬が継続して確認でき、中期後葉には和泉地域南部でも複数埋葬が散見される。これに反比例して単数埋葬墓は減少傾向にあり、墳丘規模からも中期中～後葉に単数埋葬に適合する小型墓は減少する。北部地域では中期中葉以降にやや大型の周溝墓が出現し、特に池上曾根遺跡では長軸 15 m 以上の事例が複数存在する。一方、南部地域では墳丘規模の分かる事例が不足するものの、樫井西遺跡で一辺 10 m 以上のやや大型の事例がある以外は 1～数基程度の埋葬スペースしか伴わないような比



図2 周溝墓分布の変遷

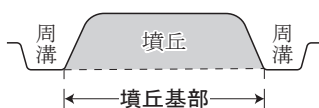


図3 墳丘規模の理解

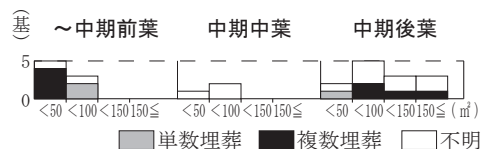


図4 墳丘規模と埋葬主体数の関係

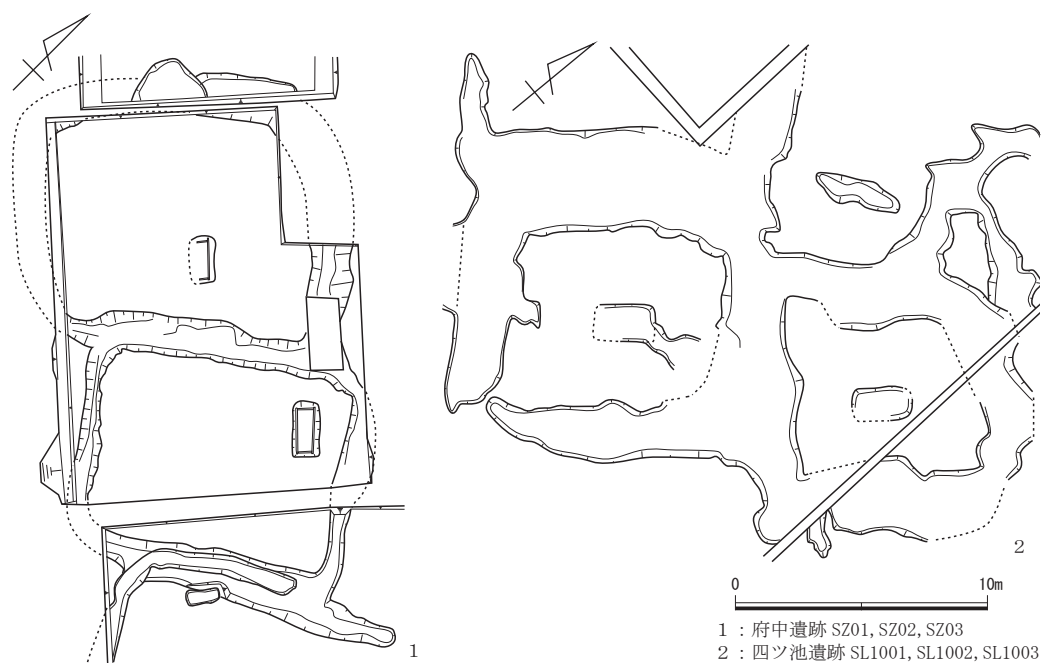


図5 和泉地域の周溝墓諸例

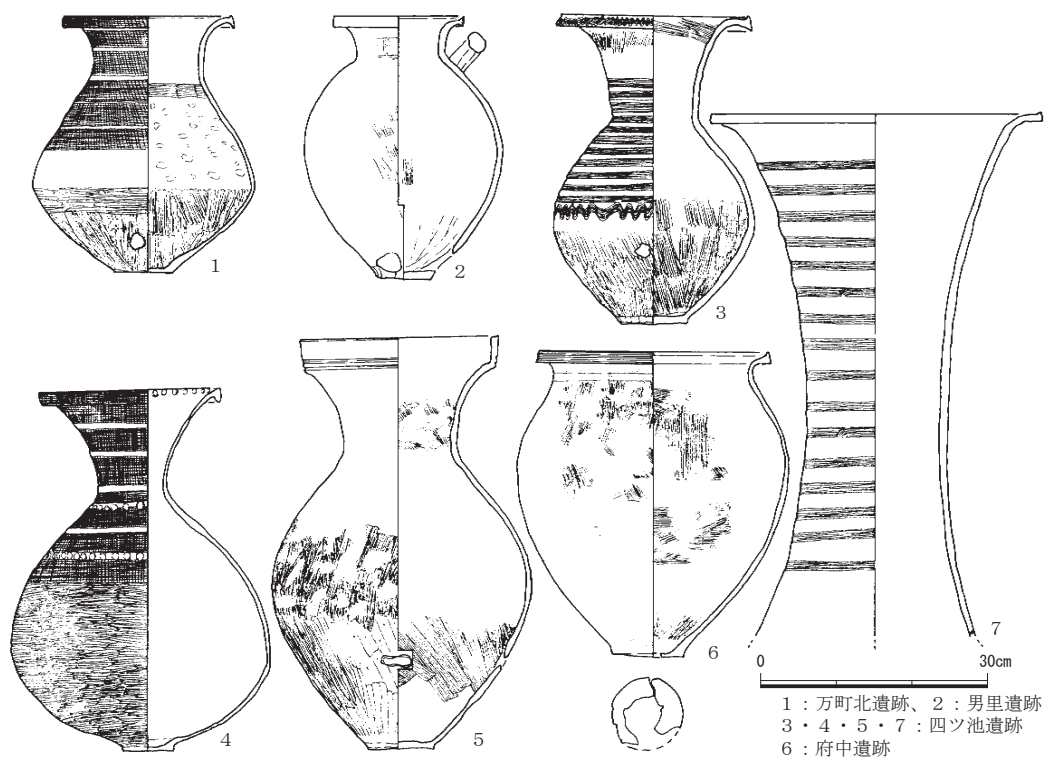


図6 出土土器諸例

較的小規模な周溝墓がほとんどである。

さて、和泉地域の周溝墓は隣接墓と周溝を共有して連続的に展開するものが多い（図5）。したがって、墳丘長は隣接する周溝墓と同規模になりやすい。また、現状、四ツ池遺跡や池上曽根遺跡に大型墓は存在するが、墓域内で卓越した規模を誇る周溝墓は確認できず、一般成員の墓域から離れた場所に単独で立地する大型墓も存在しない。他地域では上位階層者の埋葬に用いられることで知られる赤色顔料についても和泉地域の埋葬主体から確認された事例はなく、副葬品や着装品の出土事例もないこと、大型墓に整然とした埋葬配置を示す事例が確認できないことなども併せて考えると、和泉地域では階層性が墓制で表現されないようである。

**土器儀礼の状況** 周溝墓では居住域から墓域へ持ち込まれた土器（図6）が多く出土する。墳丘内に埋置される土器棺を除くと、周溝墓出土土器の多くは周溝内から出土する。ただし、出土状況から、最初から周溝内に置かれていたものと墳丘上に置かれた後に周溝内に転落したものの2パターンが存在するようだ。前者は四ツ池、鈴の宮、府中、池田下、栄の池、男里遺跡で報告されており、現位置を保つと考えられる事例は正置状態のものが多い。

さて、和泉地域では周溝墓から土器が普遍的に出土するため、葬送儀礼に土器が不可欠であったと推察される。計算すると、前期末から中期前葉には周溝墓1基あたり平均して約2個体、中期中葉～後葉には5～6個体程度の土器が出土しているが、南部地域では1基あたり平均して2.5個体程度に止まる。出土土器量に地域差が生まれる背景には、墳丘規模や埋葬主体数の小地域的差異が影響すると考えられる。

なお、中河内地域では生駒西麓産土器の墓域での選択的使用が知られており（若林1997）、和泉地域北部でも生駒西麓産の土器が一定数出土する（図6-1・4）。全体を実見できておらず詳細な数量は不明だが、四ツ池遺跡など和泉地域北部で散見される。一方、南部地域では紀ノ川下流産や東部瀬戸内系の土器が墓域に持ち込まれる事例が多いようである。

墓域に持ち込まれる土器は壺が圧倒的に多く、時期が下るにつれて壺の比率が減少する傾向を読み取れる（図7上）。居住域の土器組成と比較すると（図7下）、墓域では葬送儀礼のために明らかに壺が多く選択されていることが分かる。摂津・河内地域でも同様の指摘があり（大庭1992）、和泉地域も同様の傾向を示すことが明らかとなった。

壺類の内訳は、不明品を除くと広口壺が8割以上を占め、他は細頸壺や無頸壺、水差などで

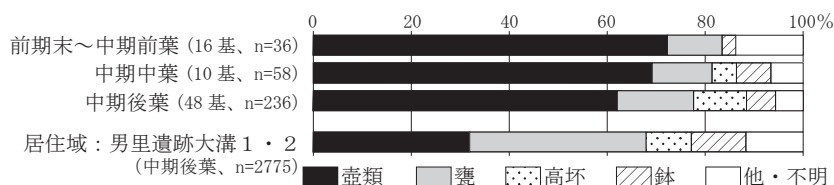


図7 墓域・居住域における出土土器の器種組成

ある。広口壺の内訳は、短頸の有文広口壺（図6-4）が3〜4割程度を占め、次いで太頸の有文広口壺（図6-1）、煮炊きに用いる無文の広口短頸壺（図6-2）、受口状口縁壺（図6-5）、広口長頸壺が続く（図6-3）。なお、和泉地域の固有器種である日明山型壺（図6-7）や垂下口縁加飾壺は墓域ではほとんど出土しない<sup>(2)</sup>。

**穿孔土器** 周溝墓では、しばしば焼成後に穿孔や打欠のされた土器が出土する。これは、一連の葬送儀礼のなかで土器への穿孔・打欠儀礼がおこなわれた痕跡を示す。穿孔や打欠により土器の一部を破損させる目的としては、容器としての機能を失するため（勝部 1976）、ケガレを祓う目的（田代 1986）が考えられている。焼成後穿孔は穿孔箇所が残存している場合、割れ円錐の有無によって識別可能である（古屋 2012）。一方、打欠は口縁部や高坏の脚裾部等に認められるが、後世に自然的に割れたものとの区別が難しく、良好な出土状況に基づいた検証が必要であるため分析が難しい。本稿では識別が容易な穿孔土器に絞って分析を進める。

和泉地域では中期前葉に穿孔土器を1点確認できるが、筆者は葬送儀礼時に開けられた穿孔ではないと考える<sup>(3)</sup>。中期中〜後葉には穿孔土器の比率が全体の1割を超える（図8上）。ただし、中期中葉の事例は四ツ池遺跡の資料に限られ、その他の地域で穿孔土器の出現と数量的増加をみるのは中期後葉である。したがって、和泉地域では中期後葉に穿孔儀礼が本格的に開始した可能性が高い<sup>(4)</sup>。なお、穿孔土器の比率は北に行くほど高く、南部で低調な傾向にあり（図8下）、地域的なグラデーションが存在する。大阪湾沿岸では中期中葉から中・南河内地域や六甲山南麓地域で穿孔儀礼が盛況であることを考えると、距離的に近い四ツ池遺跡で中期中葉に穿孔儀礼の情報が伝わり、中期後葉に南へと広まったと考えたい。

穿孔は主に壺の下半部および底部面に施される。和泉地域では体部下位への穿孔が最も多く、次いで底部面への穿孔が多い（図9）。穿孔箇所を決定する要因は明らかでないが、体部下位や底部面への穿孔の集中は、容器としての機能を失する目的を考えさせるようだ。なお、和泉地域内では穿孔の位置に北部と南部で有意な地域差は認められなかった。

以上、和泉地域の周溝墓制について時期的な変遷過程および小地域性の整理をおこなった。

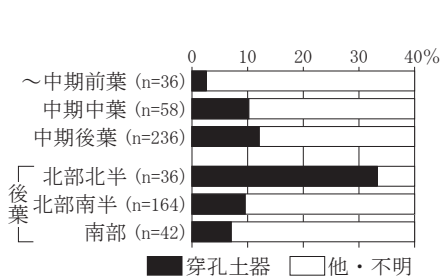


図8 穿孔土器の出土比率

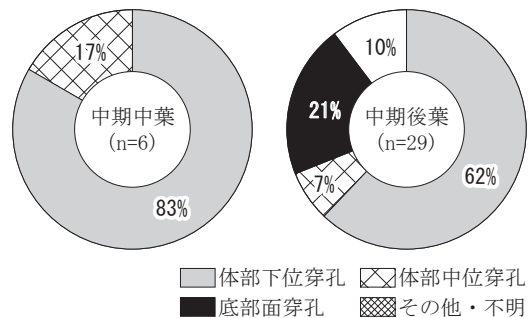


図9 穿孔位置

まとめると、①和泉地域では中期前葉に北部で周溝墓の造営が本格化し、中期後葉に南部地域まで範囲が拡大すること、②中期前葉から複数埋葬墓が散見され、中期中葉以降にはほとんどの周溝墓で複数埋葬が採用されること、③被葬者の階層は墓制から明確に読み取れないこと、④中期中葉以降に出土土器量が増加し、埋葬の増加傾向と関係すること、⑤出土土器は主に壺であり、和泉地域北部では生駒西麓、南部地域では紀ノ川下流や東部瀬戸内の土器が一定数墓域内に持ち込まれること、⑥穿孔儀礼は北部北半地域でいち早く開始し、中期後葉に本格化すること、⑦穿孔は主に壺の体部下位に認められること、などが明らかとなった。

また、和泉地域内の小地域ごとにみると、四ツ池遺跡を中心とする北部北半地域では周溝墓の造営、穿孔儀礼などを和泉地域内でいち早く開始しており、生駒西麓で製作された土器が墓域内に持ち込まれるなど、中・南河内地域との強い関係性が推察される。池上曾根遺跡などを中心とする北部南半地域では周溝墓制の開始時期が早く、生駒西麓産土器が散見されるなど北部北半地域と類似するようだが、穿孔儀礼の定着は北半地域に遅れており、穿孔土器の出土数も北半地域より少ない。南部地域では周溝墓制が中期後葉に展開する。外来系土器から紀伊や播磨との関係性が疑われ、これらの地域や北部地域から周溝墓制や葬送儀礼などの情報が伝わったと考えられる。

### 3. 墓制からみた大阪湾沿岸の地域間関係と和泉地域の特質

ここまでの検討から、和泉地域の方形周溝墓制について、時期的変遷および諸特徴の小地域的な傾向差を明らかにした。さて、筆者は以前、大阪湾北岸に位置する摂津・河内地域の周溝墓制の諸特徴を整理し、中期中葉以降に六甲山南麓地域、淀川流域を中心とする武庫川～北河内地域、中・南河内地域の大きく3つの地域性が存在することを指摘した（蓮井2022）。和泉地域は大阪湾の南岸に位置しており、北岸の各地域と深い関係にあると考えられるが、墓制からはどのような地域間関係を見出せるだろうか。

まず、墳丘規模と埋葬主体について各地域の様相を比較してみよう。和泉地域では中期前葉は小型墓が多く、中期後葉に全体の大型化と墳丘規模の多様化が認められる。これは、大阪湾沿岸地域全体の傾向でもある（図10）。一方、埋葬主体数をみると、和泉地域では中期前葉の段階から成人の複数埋葬が散見され、大阪湾全体の傾向とは異なるようである。地域差が生じた背景は不明であるが、和泉地域と大阪湾沿岸の他地域では埋葬原理が異なっていた可能性も考えられる。実際、和泉地域では中河内地域などで認められるような墳丘主軸に則った計画的な埋葬配置ではなく、方位がバラバラでやや雑然とし、中心主体部が不明瞭である事例が中期を通じて多く認められることは、埋葬方法に明確なルールが存在せず、やや踏み込んで言及すると集落の成員間の関係性を墓制で表現する傾向が弱い地域なのかもしれない。墓域内で隔絶

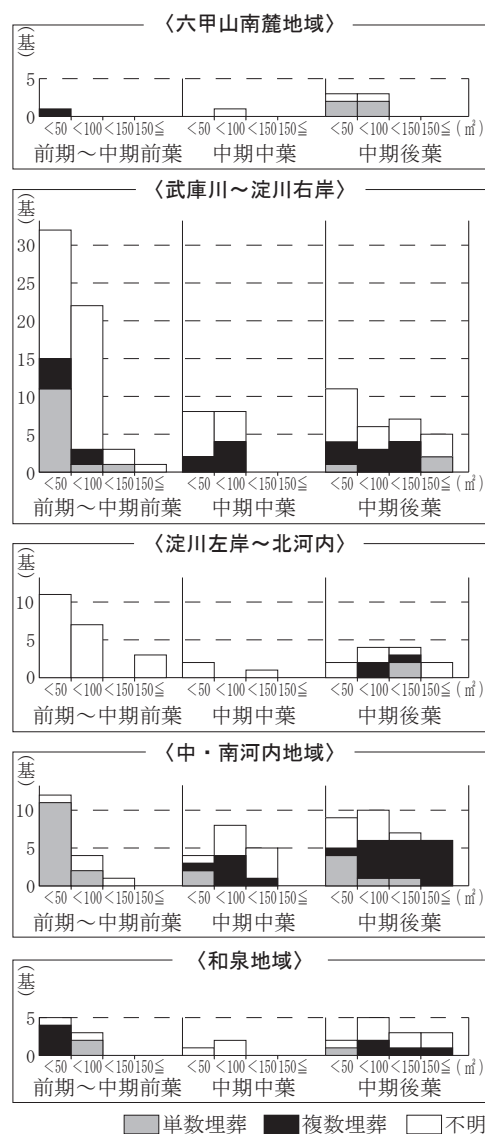


図 10 大阪湾沿岸諸地域の墳丘規模と埋葬数

した規模を誇る大型墓の不在や、埋葬主体への赤色顔料の使用が確認できないのも、こうした傾向のなかで墓制による階層表示を嫌う傾向を示すのかもしれない。

さて、大阪湾沿岸地域では周溝墓から普遍的に土器が出土する。和泉地域では中期中～後葉に周溝墓 1 基あたり平均して 5～6 個体の土器が出土し、大阪湾北岸の六甲山南麓地域も同程度の土器が出土する。一方、六甲山南麓地域を除く大阪湾北岸の摂津・河内地域では 1 基あたり平均して 13 個体程度であり、地域差が明瞭である。土器の遺存状況や 1 基あたりの埋葬主体数などに左右されるものと想定できるが、和泉地域では他地域と同様に中期後半に複数埋葬が主体をなすことを考えると、葬送习俗の差異が反映されている可能性も考えられる。

墓域から出土する土器の器種組成についても地域間で差異が認められる。和泉地域では 6 割以上が壺であったが、同様の比率は六甲山南麓地域や東播磨、伊勢湾沿岸でも認められる (図 11)。対して、六甲山南麓を除く大阪湾北岸では壺の比率がやや低い状況であり、土器出土量と同様、大阪湾沿岸では中央部の摂津・河内地域と西部・南部の六甲山南麓・和泉地域で様相が分かれるようである。

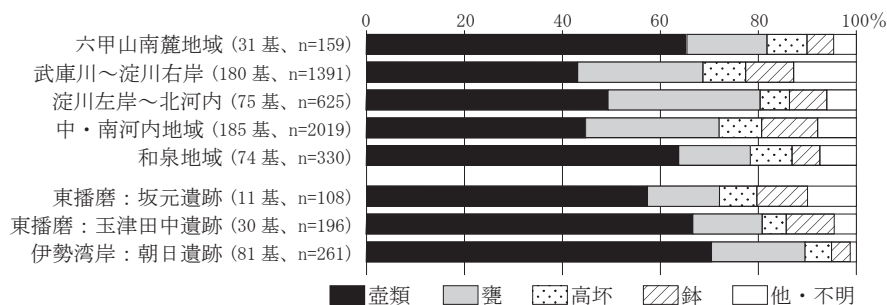


図 11 器種組成の地域間比較

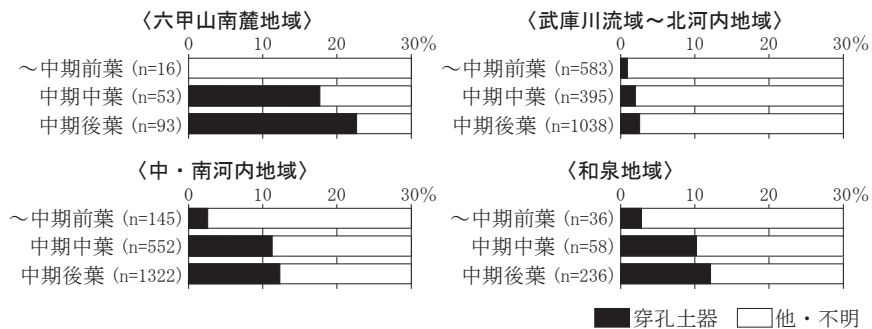


図 12 穿孔土器比率の地域性と変遷

一方、穿孔土器についてみると（図 12）、和泉地域では全体の約 1 割強の土器の体部下位などに焼成後穿孔が確認できる。大阪湾沿岸では穿孔儀礼の低調な地域（武庫川流域～淀川流域）と盛んな地域（六甲山南麓以西、中・南河内地域、和泉地域）に二分され、和泉地域は後者に属する。なお、穿孔土器は主に壺であるが一部鉢などの供膳具にも及ぶ点、体部下位への穿孔が主体となる点中は・南河内地域と共通する要素である。

以上の検討から、和泉地域の墓制は穿孔事例からみると中・南河内地域との類似性、土器出土量の多寡や使用器種の選択からは六甲山南麓地域や東播磨地域などとの共通性も認められることが明らかとなった。ここで先稿（蓮井 2022）の成果と合わせて墓制から大阪湾沿岸地域全体の様相を概観すると、中期中葉以降に大阪湾岸中央部の中・南河内地域、北東部の武庫川～淀川流域、西部の六甲山南麓地域、南部の和泉地域の大きく 4 つの地域でそれぞれの葬送儀礼の地域色が顕在化するようである。そのうち六甲山南麓地域は東播磨地域や武庫川～淀川流域地域と、武庫川～淀川流域地域は六甲山南麓地域と、和泉地域は中・南河内地域や東部瀬戸内地域との共通性が認められる。一方、中・南河内地域は一部和泉地域と共通性が認められるものの、埋葬主体や出土土器の諸要素に特異な様相がみられる。これまで周溝墓研究の中心となってきた中・南河内地域の様相は大阪湾岸のスタンダードではないことに注意が必要だ。

また、和泉地域では墓制から明確な階層構造が確認できないことも分かった。墓域の様相とは対照的に、居住域では池上曽根遺跡の大型建物を中心とする空間構造や男里遺跡の大型建物を表現した絵画土器など、求心的な遺構の存在を示す証拠が見つかった。大阪湾岸の他地域では中期後半に上位階層を表現する周溝墓を確認できるため、墓制に階層制が表現されないのは和泉地域の特質と言ってよい。上位階層の未発達な地域であったのか、墓制以外で集団構造の表示がおこなわれていたのか、階層表示を意図的に排除する社会であったのか、墓制のみでは解決できない問題であり、今後居住域の様相と合わせて検討する必要がある。

なお、和泉地域ではその後、弥生時代後期に万町北遺跡で方形周溝墓、府中遺跡で方形周溝墓と円形周溝墓が、終末期には下池田遺跡で円形周溝墓が造営される。この時期の周溝墓は埋

葬数が限定されるため一部の上位層の墓と考えられ、和泉地域でも墓制による階層表現が開始したことを示す。福永伸哉氏は、庄内式期における墳形の選択について、摂津などの畿内北部では円形、河内地域では方形の傾向がみられ、墳形の選択に当時の地域間関係が表れることを指摘している（福永 2008・2022）。弥生後期の和泉地域で円形・方形の両者が認められる背景には、弥生中期以来の葬制にみる、河内・紀伊・東部瀬戸内などといった多くの地域との交流や、固有性を保持しつつ他地域の習俗を柔軟に受け入れる風土が関係するのかもしれない。

## おわりに

本稿では、これまで取り上げられてこなかった和泉地域の弥生墓制について、時期的変遷や小地域性を明らかにし、葬送儀礼からみた和泉地域の特質や、大阪湾沿岸地域内の地域間関係について論じた。ただし、和泉地域では方形周溝墓のほかにも木棺墓、土壙墓、土器棺墓といった多様な墓制が知られるが、本稿では筆者の力不足により論及することができなかった。また、居住域や生産域の問題について、墓域と絡めて考えていく必要がある。これらを今後の課題とし、本稿を終える。

## 謝 辞

本論執筆にあたり、以下の方々・諸機関に有益なご教示や、資料調査で格別のご高配を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

上田裕人、貝川克士、相馬勇介、泉佐野市教育委員会、和泉市教育委員会、大阪府教育庁、大阪府文化財センター、堺市（敬称略、五十音順）。

## 註

- (1) 報告書掲載資料を対象とし、図化に耐えない細片、混入品等は除外した。また、供献土器の分析では土器棺と考えられる、墳丘内に埋置された土器についても対象から除外した。
- (2) 日明山型壺は土器棺として利用される事例も少数あるが、周溝墓からは数点のみの出土であった。同じく和泉地域固有のものとされる、口縁端部が垂下する装飾性の高い広口壺（若林 2015）についても墓域からの出土数は数点であり、葬送儀礼に頻繁に使用される器種ではないようだ。
- (3) 甕の底部面にやや摩滅の認められる焼成後穿孔が開けられた事例である。類例は同時期の畿内地域では居住域からも多く認められるものであり、穿孔部の摩滅も考えると葬送儀礼に穿孔されたものではなく、実用に際する何らかの機能を持たせたものである可能性が高い。
- (4) 穿孔箇所欠失の可能性や、識別不能な打欠の存在を考えると、現状把握できる儀礼痕跡を有する土器は全体の一部である可能性が高い。したがって、中期後葉においても穿孔土器の比率は

全体の約12%ほどであるが、穿孔土器の出土遺跡数が急増すること、出土量自体も増加すること、多くの穿孔土器事例で知られる中・南河内地域でも同程度の出土比率であることを考え、穿孔儀礼が本格的に開始したと判断したい。

## 参考文献

### 〈論文・論考〉

- 秋山浩三 1999「近畿における「神殿」「都市論」の行方」『ヒストリア』第163号 大阪歴史学会、大阪：pp. 1-30
- 池峯龍彦 2006「和泉北部地域における弥生時代集落の動向」『みずほ』第40号 大和弥生文化の会、奈良：pp. 100-118
- 乾 哲也 1996「弥生中期における池上曽根遺跡の集落構造」『ヒストリア』第152号 大阪歴史学会、大阪：pp. 17-30
- 上田裕人 2021「弥生時代中期後半における池上曽根遺跡の集落内部構造について」『ヒストリア』第289号 大阪歴史学会、大阪：pp. 1-27
- 大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』26 大阪大学文学部、大阪：pp. 89-113
- 大庭重信 1999「方形周溝墓からみた畿内弥生時代中期の階層構造」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 169-183
- 大洞真白 1999「方形周溝墓から見た池上曽根遺跡」『池上曽根遺跡一拠点集落東方の墓域の調査一』大阪府教育委員会、大阪：pp. 111-125
- 勝部明生 1976「穿孔土器の考察一大阪船橋遺跡出土例を中心として」『横田健一先生還暦記念日本史論叢』横田健一先生還暦記念会、大阪：pp. 69-92
- 酒井龍一 1984「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』3 奈良大学文化財学科、奈良：pp. 37-51
- 相馬勇介 2020「大阪湾岸における方形周溝墓から出土した穿孔土器の様相」『ひょうご考古』第17号 兵庫考古学談話会、兵庫：pp. 36-57
- 田代克己 1986「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『村構造と他界観』鳥越憲三郎博士古稀記念会、東京：pp. 82-112
- 地村邦夫 1999「和泉地域Ⅲ・Ⅳ様式の編年一97年度調査出土時の検討一」『池上曽根遺跡一拠点集落東方の墓域の調査一』大阪府教育委員会、大阪：pp. 88-110
- 寺沢 薫 1974「大阪湾沿岸地域における遺跡群の展開とその社会（上・下）」『古代学研究』第72・73号 古代学研究会、大阪：pp. 14-33、21-34
- 寺沢 薫・森岡秀人（編）1989『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社、東京
- 寺沢 薫・森岡秀人（編）1990『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社、東京
- 蓮井寛子 2022「周溝墓出土土器からみた葬送儀礼の地域性一弥生時代中期の大阪湾沿岸地域を中心に一」『待兼山論叢』第56号史学篇 大阪大学文学部、大阪：pp. 57-80
- 広瀬和雄 1998「弥生都市の成立」『考古学研究』第45巻第3号 考古学研究会、岡山：pp. 34-56

- 福永伸哉 2008「大阪平野における3世紀の首長墓と地域関係」『待兼山論叢』第42号史学篇 大阪大学大学院文学研究科、大阪：pp. 1-26
- 福永伸哉 2022「ヤマト政権成立期における畿内地域の円丘墓と方丘墓」『纏向学の最前線』桜井市纏向学研究センター、奈良：pp. 357-366
- 古屋紀之 2012「方形周溝墓出土土器の穿孔方法—東京都大田区久ヶ原遺跡における穿孔具共伴事例から—」『大田区立郷土博物館紀要』第19号 大田区立郷土博物館、東京：pp. 24-32
- 三好 玄 2016「和泉地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会、大阪：pp. 161-188
- 村上富喜子・中村淳磯 2005「第1節 大溝1・2出土土器の組成」『男里遺跡』大阪府文化財センター、大阪：pp. 339-356
- 山崎頼人 2006「和泉南部地域における弥生集落研究の現状と課題」『みずほ』第40号 大和弥生文化の会、奈良：pp. 119-140
- 若林邦彦 1997「中河内弥生中期土器にみる諸相—「生駒西麓型土器」のもつ意味—」『考古学研究』第43巻第4号 考古学研究会、岡山：pp. 58-76
- 若林邦彦 2001「弥生時代大規模集落の評価—大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に—」『日本考古学』12 日本考古学協会、東京：pp. 35-54
- 若林邦彦 2015「弥生時代地域社会構造の理論的枠組み」『同志社大学考古学シリーズXI 森浩一先生に学ぶ』同志社大学考古学シリーズ刊行会、京都：pp. 171-184

## 遺跡文献

- 阿部幸一（編）2010『府中遺跡』大阪府教育委員会、大阪
- 石神 怡・井藤 徹・伊藤久嗣・江谷 寛・萩原儀征・瀬川芳則・前田芳彦 1970『池上・四ツ池』第2 阪和国道内遺跡調査会、大阪
- 石田 修 1979『四ツ池遺跡昭和53年度発掘調査概要』堺市教育委員会、大阪
- 石部正志 1979「第五章 遺跡各説」第二節 弥生時代『岸和田市史』第1巻 自然・考古編 岸和田市史編さん委員会、大阪：pp. 468-589
- 泉佐野市教育委員会 1996『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』、大阪
- 内本勝彦（編）1991『四ツ池遺跡発掘調査概要報告—Y0B 第103地区・第107地区—』堺市文化財調査概要報告書第24冊 堺市教育委員会、大阪
- 大阪府教育委員会 1973『池上遺跡発掘調査概要』Ⅱ、大阪
- 大阪府教育委員会 1975『池上遺跡発掘調査概要』Ⅳ、大阪
- 奥野義雄 1972『泉南市向井山遺跡発掘調査報告』泉南市教育委員会、大阪
- 貝川克士（編）2002 泉佐野市埋蔵文化財調査報告62『岡ノ崎遺跡—01-1区の調査—』泉佐野市教育委員会、大阪
- 貝川克士（編）2013 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要70『榎井西遺跡—12-1区の調査—』泉佐野市教育委員会、大阪

- 樫根逸子（編） 1992『諸目遺跡—91-1 区の調査—』泉佐野市文化財発掘調査報告 23 泉佐野市教育委員会、大阪
- 北野俊明 1977『昭和 51 年度四ツ池遺跡調査概要—方形周溝墓の調査—』堺市埋蔵文化財研究会、大阪
- 北野俊明（編） 1983『鈴の宮Ⅲ』堺市文化財調査報告書第 11 集 堺市教育委員会、大阪
- 北野俊明（編） 1986『鈴の宮Ⅴ』堺市教育委員会、大阪
- 久米雅雄 1982『神光寺跡発掘調査報告書—大阪府泉南郡阪南町石田所在—』阪南町教育委員会、大阪
- 久米雅雄・佐久間貴士・村上富喜子 1984「Ⅳ 菱木下遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』大阪文化財センター、大阪：pp. 147-486
- 近藤利由・土師春樹・村上博史・忍 薫 1979『栄の池遺跡』岸和田遺跡調査会、大阪
- 白石耕治・松村まゆみ（編） 1991『池田下遺跡』和泉丘陵内遺跡調査会、大阪
- 鈴木陽一（編） 1986『昭和 60 年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅵ』泉佐野市教育委員会、大阪
- 十河良和（編） 1998「1. 四ツ池遺跡発掘調査概要報告 四ツ池遺跡における律令期集落の調査—YOB-116 地点 堺市鳳北町 8 丁目—」『堺市文化財調査概要報告』第 70 冊 堺市教育委員会、大阪：pp. 1-32
- 第 2 阪和国道内遺跡調査会 1971a『昭和 45 年度第 2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書 3』、大阪
- 第 2 阪和国道内遺跡調査会 1971b『昭和 46 年度第 2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書 4』、大阪
- 高島 徹・服部文章 1984「淡輪遺跡発掘調査概要・Ⅵ」『大阪府文化財調査概要 1983 年度』大阪府教育委員会、大阪：pp. 1-46
- 地村邦男（編） 1999『池上曾根遺跡—拠点集落当方の墓域の調査—』大阪府教育委員会、大阪
- 土山健史（編） 1995「四ツ池遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第 48 冊 堺市教育委員会、大阪：pp. 1-15
- 中村淳磯・岡田佳之（編） 2005『男里遺跡』大阪府文化財センター、大阪
- 西川寿勝（編） 1997『池上曾根遺跡発掘調査概要—池上下宮線建設に伴う調査Ⅰ—』大阪府教育委員会、大阪
- 西川寿勝 2000『池上曾根遺跡Ⅱ—拠点集落北東方の墓域の調査—』大阪府教育委員会、大阪
- 西川寿勝 2001『池上曾根遺跡Ⅲ—拠点集落北方の墓域の調査—』大阪府教育委員会、大阪
- 橋本高明（編） 1999『三軒屋遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会、大阪
- 橋本高明・芝野圭之助・石神 怡 1984「Ⅲ 西浦橋遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』大阪文化財センター、大阪：pp. 25-145
- 樋口吉文（編） 1981「四ツ池遺跡発掘調査報告書」『向井神社跡遺跡—反正陵古墳・二重堀— 四ツ池遺跡—第 80 地区・第 81 地区—』堺市教育委員会、大阪：pp. 1-26
- 樋口吉文（編） 2013『四ツ池遺跡その 6 昭和 51 年度発掘調査報告書』堺市教育委員会、大阪
- 森 茂（編） 1993『万町北遺跡Ⅰ』和泉丘陵内遺跡調査会、大阪
- 森村健一（編） 1985『四ツ池遺跡—YOB87・88— 陶邑・陶器山地区 250 号窯—MT—250 号窯』昭

和 59 年度国庫補助事業発掘調査報告書、大阪  
森屋直樹（編） 1987『昭和 61 年度三軒屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会、大阪

#### 挿図出典

図 1 ～ 4 ・ 8 ・ 9 ・ 12 : 筆者作成

図 5 : 1. 阿部編 2010 第 45 図を一部改変して再トレース 2. 十河編 1998 第 10 図を一部改変して再トレース

図 6 : 1. 森編 1993 第 92 図 1 を再トレース 2. 中村・岡田編 2005 図 143 - 979 を再トレース 3. 樋口編 1981 第二図 4 を再トレース 4. 樋口編 1981 第二図 3 を再トレース 5. 樋口編 1981 第三図 6 を再トレース 6. 阿部編 2010 第 50 図 1020 を再トレース 7. 樋口編 1981 第四図 13 を再トレース

図 7 : 男里遺跡大溝 1 ・ 2 は村上・中村 2005 のデータをもとに筆者が作成、その他は筆者集成データより作成

図 10 ・ 11 : 蓮井 2022 に加筆・一部修正